（城西人文研究第13号）

【研究ノート】

R. Huch の〈スイスの春〉覚え書

鈴　木　敏　夫

＜スイスの春＞(Frühling in der Schweiz) はブラウンシュヴァイク生まれの女流作家・歴史家リカルダ・フーフ (1864—1947) がその晩年1938年に発表した自伝的作品である。そこに綴られた記録は彼女のスイスでの大学生時代，つまり1887年のチューリヒ到着から1896年のブレーメンへの移転までの約10年間の青春時代の回想書，彼女の詩と真実である。

ドイツ文学にはゲーテの＜詩と真実＞を筆頭に数多くのすぐれた自伝文学作品があるが，このフーフの＜スイスの春＞も僅か100頁に満たない小品ながら，それらの名作と肩を並べる飾り気のない格調の高い作品である。

この作品の舞台はスイスである。何故フーフがこの地で大学生活を送ったかについては二つの大きな理由があげられる。第一には故郷のブラウンシュヴァイクに留まることが精神的に耐え難くなったからである。というのはフーフの姉の夫 Richard Huch に彼女が叶わぬ恋をしたからである。同時にブラジル貿易で成功した家運が父の代に傾きかけ，彼女も自力で生活していかなくてはならなくなったという事情があった。第二には第一の理由と関連があるが，彼女の才能を伸し，職を得るためには高等教育の場つまり大学に入ることが先決問題であった。ところが当時のドイツの大学はまだ女性に門戸を解放していなかったので，女性の学問研究に解放的であったスイスが選ばれたのである。

この自叙伝の魅力はフーフ自身が体験したさまざまな事件，出合った人物の多様性と豊富さにあるのは当然であるが，単にそれだけに留まらない。彼女の文章の魅力にある。彼女のチューリヒ大学時代の親友の一人で，最初数学を後

に化学を専攻し，フーフの伝記＜Leuchtende Spur—Das Leben Ricarda Huchs＞(Rainer Wunderlich Verlag) を世に問うた Marie Baum の女性らしいがしかし論理的平明さよりも主観的・感情的にすぎる文章に較べて，フーフの文章は主観を抑え，客観性・論理的明晰さに格段とまさっている。フーフの文体はすでに文筆家としての長い経験に裏うちされているとはいえ，論理的に整然としているだけではない。些事に陥込まず，つぼを押えて全体の構成のバランスを配慮した，しかも芸術的彫琢のほどこされた名文であるといえる。

教授陣と学生から成り立っている大学という社会が，この回想記の舞台として大部分を占めているので，その社会の構成要素である教授たちの顔ぶれ，学友たち，フーフの心に刻印された彼らの印象と交流とをスケッチしてみることは無意味ではなかろう。

正規の大学入学資格をもたなかったフーフには，いわゆる大学入学資格検定試験に合格することが先決であった。

古典語や自然科学系科目のために夫々家庭教師についている。これら個人教育の担当者が個性的に描き出されていることが読者の興味を惹くが，彼らがその家族の歴史において複雑な過去をもっていることである。たとえばその一人は代々のスイス人であるが，他の一人は先祖がフランス革命のさいにスイスに逃がれてきたという過去をもっている。

とりわけ日本の読者の関心を惹き，あるいは羨望の念をおぼえさせるのは，そういう事実が決して現代に始まったのではないスイスのもしくはヨーロッパの大学に学ぶ学生の国際性の豊かなことである。このことはフーフの大学生活の中で友情を結ぶ数多くの学友たちにも当てはまる。ルーマニヤ，ハンガリー，ロシヤ，フランス，ノールウェー，そしてドイツの各地から彼らはスイスの大学に学んでいる。大学生活の中で彼らはさまざまなお国ぶり，国際情勢，各国の歴史や文化，風俗を知り，人間についての多様にして豊富な知識を獲得しながら人間形成を成しとげていく。こうした各国の学生を迎え入れるスイスという国の寛大さ，偏見のなさは，本質的に芸術家の才能を有し，何よりも精

神の自由を強く求めるフーフにはまことに恵まれた環境であったに違いない。そのことは学問的成果のためばかりではない。フーフの人間形成，芸術家的才能の展開のために真実幸運だったと言わざるをえない。

この書物の中には当然のことながら多数の教授たちが実名で登場してくる。彼らの専門分野や学問的業績については現代の我々にとって百科事典的知識以上の詳細については不明であるが，フーフの記述から彼らの人物や講義ぶり，彼らへの評価などをうかがうことにしたい。何故ならフーフの自叙伝の中でこそ彼らが，さらには彼女の友人や知人たちが息づいていると言えるからだ。

大学の講義や演習でフーフが直接に接した教授たち，または著作を通して間接的に知りえた教授たちに対するフーフの評価が正当であるか否かは判断できないが，少なくとも彼らに対しての人間的好悪や学問上の評価には単なる感情的なものだけでなく，一応筋の通った理由が表現されているように思える。つまりフーフは常に他人に向かって自己の立場を説明できる，論理的判断の下せる人間であった。

フーフの学位論文は＜Die Neutralität der Eidgenossenschaft besonders der Orte Zürich und Bern während des spanischen Erbfolgekriegs＞（スペイン王位継承戦争中のスイス連邦特にチューリヒ州およびベルン州の中立について）という標題をもっているが，三人の教授が審査に当った。この書物の中でも三人の教授の特徴が夫々述べられている。

その第一はスイス史を講じたヴィス教授（Georg von Wyß）で，彼はフーフの論文を丹念に読んでくれて，論文の書き替えを勧めた。その理由にあげられているのは，フーフが「もっとも肝心な部分を常に副文で表現している」(S. 47) という指摘である。この場合の副文（Nebensatz）というのが文法的な意味で従属文のことであるとすると，例えば，時・所・理由・譲歩・条件などによって主文を限定することに力点が置かれて，彼女自身の決定的，断定的意見の表明に明確さが欠け，あいまいさ，ためらいが残るような形で論旨が進められているという批判になるのであろうか。そしてフーフはこのヴィス教授の忠告，助

言に従わなくてはならぬと思いながらも，「自分の文章にはもはや改善の余地がないという感情」(S.47) に苦しんだと克己のための悩みを卒直にかくさない。暴露趣味など微塵もない彼女のことだから，その誠実さ，けれん味のなさが好ましく浮び上ってくる。

次には中世史専門のクノーナウ教授 (Meyer von Knonau) で，＜スイスの春＞を執筆する6年前まで存命していた。彼の死を多勢の人々が悼んだと書いている。歴史学専攻のフーフは，彼が実践してみせた歴史的資料の実証的かつ徹底的な研究態度を高く評価している。「事実として存在したことを，できるかぎり正しく完全な形で人に伝えること」に満足している点を評価しているが，「学問の世界を出て，時代の混沌と闘争の闇の中で人の世を照らす灯台となることを望まなかった」(S.23) としてその人間的活動に限界があったと反面で批判を加えている。

クノーナウ教授への批判に加えて，フーフは間接的にしか知らないランケ教授 (Leopold von Ranke) についても批判を加えているが，その批判はフーフの歴史や歴史学に対する立場を表明している点で興味がある。

ランケの「世界観は平滑にすぎ，人うけがよくできており，上流階級の立場から物事を観察しており，そのよって立つ土台が貧弱で，温い血が充分に通っていない」，「現実の世界ははるかに粗野，残酷，悪意に満ち，卑劣であるが，それ故にこそかえって一層美しい。」(S.50) と指摘する。歴史への関心の根底において，事実や事件を客観的に正確に記述するのではなく，「偉大な人物が登場し，戦い，勝ちあるいは屈伏していく事件の多彩な流れとして，また自分の想像力が入りこんでいきドラマチックに形成する素材として」(S.13) 歴史を創作者の立場で見ようというのだから，たとえ，講義や著書の形をとった学問的作品のはらむ形式的または表現上の完全性指向に問題があったにしろ，こうした批判が生ずるのは当然かも知れない。これはまた歴史の観方におけるアポロン的なものではない，ディオニュゾス的なものの強調であると言えよう。

第三番目は文学史家のベヒトルト教授 (Jakob Bächtold) である。＜Gottfried Kellers Leben＞，＜Geschichte der deutschen Literatur in der Schweiz＞

の著者として有名であり，特にフーフはケラーの影響を受け，チューリヒで最初に住んだGemeinde通りで敬愛する老ケラーが散索する姿を見たことを記しているのであるが，それにも拘らずこの教授については余りふれていない。

女子学生を受け入れたチューリヒ大学の教授陣の中には女子大生に対する偏見，反対論があったことがフーフの記述からよく分る。

彼女の手厳しい批判の対象にされているので，当人に対する配慮から匿名で登場する産婦人科学専門の教授がいる。少し前の日本の大学にも存在したようなタイプであるが，講義中に反女子学生論をひんぱんに行ない，しかも彼の講義を聴かないと卒業できない女子学生たちの憤懣と怨恨をかっていた。

親友の医学生サロメ（Salomé Neunreiter）はフーフと計かり，この教授を後世のみせしめにする目的で＜Rachedolch＞（復讐の刃）という書簡体の小説を合作したが，紛失してしまった。多分フーフのもっとも早い時期の文学的習作であったと思われる。

ドイツの大学で学ぶことのできなかったフーフがスイスにやってきて，直接自身で蒙った精神的苦痛ではないにしろ，こうした問題との対決が創作の契機となったことは面白い。

既に触れたサロメやマリー・バウムの他に多くの男・女学生がおそらく全て実名で登場してくる。歴史学専攻のフーフが親交を結んだ女子学生の大部分は奇妙と思えるほど医学生が多い。チューリヒ大学に学ぶ女子学生たちの親睦と互助の組織である女子学友会のメンバーに医学生が多かったせいかも知れない。フーフはしかもその会長に選出されている。

＜スイスの春＞に登場する友人たちの殆んど全員についてフーフは彼らの出身地，専攻分野，容貌，性格，在学中と卒業後の暮しぶりをかなり刻明に記している。

町並や風景ならいざ知らず，人物というのはその特徴の把え方がどんな場合にもかなり主観的，個性的にならざるをえないから，登場人物が既に歴史上の存在になってしまっていればいるほど，読者にとっては実像を把える手がかり

が極めて曖昧なものにならざるをえない。にも拘らず<スイスの春>の中ではフーフの筆力のおかげで，登場する人物たちの実像がかなり鮮明な輪郭をとどめて息づいている。

大学の規模が現代社会におけるように，マンモス化，大衆化しておらず，ことに女子学生が絶対的に少数であったから，彼女たちは知能的にも，経済的にもまたその家庭環境においてもずっと恵まれていたであろう。それでも彼女たちの多くは賄つきの下宿でかなり質素な生活をしていたようである。中には前述のサロメのように個室に住んで，下女を雇っていた者も例外的にあった。

<復讐の刃>を合作したサロメについては「アルザスの出身で，黒目が魅力的，賢明で行動的，気分屋」(S.31)ではあったが，英・独・仏語に堪能であった。そしてある時手を怪我した化学専攻のブロンドのドイツ人学生の手当てをしたことから恋仲になった。しかし彼が経済的に彼女を幸福にするのぞみが薄いことが原因で彼女の母の不興をかい，学資を断たれ，自分で生活費をかせぐために医学の勉強を放棄して，ライプツィヒに移ってジャーナリストになった。恋に殉じた情熱的な女性である。

動物学を主専攻にし，副専攻に植物学と地質学を学んだプレーン(Marianne Plehn)は山椒魚に興味をいだいて飼育しはじめたフーフに飼育法を数え，餌のみみずを持ってきてくれる。西プロイセンのLubochin出身で，そのあたりはPlehn姓が多いので，ナポレオンがモスクワ遠征の折り，このあたりの領地の所有者が誰かを部下に尋ねるたびにPlehnという答が返ってくるので「cette plaine est pleine de Plehn」(このあたりの平野(へいや)は平野(ひらの)姓であふれている)と言ったというユーモラスな語呂合せのようなエピソードがあるとフーフに語った。

この山椒魚をはじめ，自然科学の専攻でもないフーフがかなり珍しい部類に属する動物に並々ならぬ興味を示しているのが注目を惹く。

例えば，チューリヒにやってきて住みついたばかりの頃，後でのべるヴァナー夫人(Wanner)の下宿人であった時，フーフに好意を寄せ，フーフがそうされるのを当然のように好意をもって交き合っていた大学生ヴェットシュタイン

(Alexander Wettstein)—Küsnacht の師範学校長の息子—は，「当時行なわれていた全ゆる種類のスポーツに熟達していて」(S.17) フーフがヨットに乗ったことがないと聞くと，ヨットに誘い，彼自身ヨット乗場で跨ぎ損ねて湖水に落ちると，今度はアルプスのユングフラウに案内したいと申出る。しかし登山技術の未熟さを承知してフーフが参加を断ったこの登山の帰途彼はスリップして仲間6人共に遭難してしまう。この山行きの土産にと彼女が頼みこんだのがなんとアルプスマーモット (Murmeltier) である。

フーフはこの他にも亀を飼ったり，猫や鼠に愛情を注いで双方の共存を計ったりしている。

フーフの人物描写にはいつもユーモアが溢れている。

文学専攻のヴェルゲラント (Mathilde Wergeland) はノルウェー人で金髪，繊細で聡明な顔立ちをしている。ドイツ語も上手だが，興奮すると相手が教授であれ誰であろうと du で話しかけ，仲間の失笑を買っている。日本人ならさしずめ人称変化の簡単な Sie ですませてしまうのではないかと思われる。

医学生ローゼンベルク (von Rosenberg) は皇帝フリートリヒの落胤であるらしいが，彼女自身はそれを語りたがらず，金銭的に母に依存していることに悩み後に自殺をとげる。

「金髪で可愛らしく，新しいタイプの女性」(S.35) であるとフーフの思った医学生アイゾルト (Annchen Eysoldt) は「他人にとっては粗野と思えるような卒直さ」で物を言う。彼女にとって「愛は感覚的衝動」であった。ポーランド系ユダヤ人で社会主義者のひどく貧しい恋人がいた。二人の仲が駄目になると，スイス人の弁護士と結婚してしまう。フーフが新しいタイプと書いたのは，感覚的衝動のおもむくままに，結婚生活の望みのない貧しい男ともつき合い，しかし結局は実利をとって安定した生活を求めるという奔放で打算的な女性をさすのであろう。

同じく医学生のブルーム (Agnes Bluhm) はフーフの交き合った女性の中でもっとも気品があり，「バラ色の皮膚」(S.36)の持主で，当時既に最終学年にあった。<スイスの春>執筆当時依然として学問的活動を続けしかも成功している。

フーフが大学に入った最初の学期に知り合ったのが国民経済学専攻の男子学生ミュラー（Hans Müller）である。「メクレンブルク出身で裕福な家庭の出」であるが，社会民主主義の信奉者となったため，父親の不興をかった。若さからするいわゆる理想主義に走るタイプの学生で，フーフも彼の案内で Platter 教授の社会主義の講義に出ることになる。当時の学生たちを惹きつけた社会民主主義はブルジョワ階級にとっては犯罪者と同一のレッテルを貼られることであったらしい。社会の下層の人々の生活を改善しようとするこの主義の方針に共鳴したフーフは「若い社会民主主義者との接触で私に残されたこん跡は詩的なもの，歴史的なものになり下ってしまった」と書き，またプラッター教授の講義は彼女の歴史学の研究には「脱線」にすぎなかったと，些か自嘲的に回想している。

このミュラーも次の学期にはジュネーヴに移り，変転に富んだ数年をドイツとスイス両国で送った後父とすっかり和解してチューリヒに落着くことになった。

大学紛争を体験した日本の大学生の多くになんとなく似ているところがあるのではないか。

「1887年1月1日夕刻，私たち，私の兄と私とはチューリヒに着き，ベルヴュ・ホテル（Hotel Bellevue）に投宿した。」という書き出しで＜スイスの春＞ははじまっている。そしてその翌日下宿探しに出かけるが，最初に見分した家が気に入り部屋を借りることを決めてしまう。「部屋そのものよりもそこの女家主」がフーフの気に入ったという単純な理由からである。

この家つまりヴァナー夫人（Wanner）の家は「ゲマインデ（Gemeinde）通りにあって，当時雪の積った小庭に囲まれ，番地は25番地であった」。ゲマインデ通りにフーフが住んだのは事実だが，Paul Mutzner の＜Die Schweiz im Werke Ricarda Huchs＞の記述によると番地はフーフの記憶違いだったかも知れない。

ブラウンシュヴァイクの生家で祖母に育てられたフーフは，ガスランプを使

っていたが，チューリヒでは石油ランプだったので，火屋の掃除の仕方が分らず難儀するが，ヴァナー夫人が親切に扱い方を数えてくれる。

この夫人は人は善いし，またいかにも一見下町のおかみさん然としたところがあるが，亭主はギムナジュウムの先生で，夫人の生家はスイスの Appenzell 地方で名前を知られた教育施設の設立者，教育者であり，その名前をフーフも知っている。ペスタロッチの名前も出てくるので，スイスが教育という点でヨーロッパの先進国であったことが分る。彼女をよく見れば顔立ちはすらりと華奢で下町のおかみさんでは決してない。おそらくそんな出自を軽々に他人に吹聴しない飾らぬ人柄がフーフの気に入ったのである。

「22才の乙女として」はるばるブラウンシュヴァイクからやってきたフーフがこのヴァナー夫人の下宿に引っ越してきた最初の晩，隣室の怪しい物音にフーフは泥棒の侵入かとおどろき，その豊かな空想力はハウフの童話＜シュペッサルトの宿屋＞を連想するが，翌日夫人に尋ねてみると，その原因が夫人の台所の残飯あさりの鼠たちの跳梁跋扈する足音であり，食事の後ですぐに食器を洗い片づけるのは面倒だから，きれいな食器がなくなるまで流しに積み重ねておいて鼠に掃除をさせるのだという。また一番手取り早い栄養補給の方法であるとして夫人がビールを多量にたしなんだという生活方法はフーフをびっくりさせはするが，昼食をとる適当な場所が分らず，当時の慣習に反して，フーフが女一人で大工職人の同業組合会館の食堂に出かけたことを知って，契約条件にない昼食の用意までしてくれる人情味の厚い主婦であり，また年頃の娘の躾と考えてフーフにピアノの伴奏でダンスを教えてくれる教養人でもある。

しかし夫との離婚訴訟が進行中で，両親の争いの波紋の中にある不幸な彼女の子供たちへのいかにも若い女性らしい配慮から，夫婦の仲を元通りにしたいとフーフは様々な努力をする。家族全員参加の日曜日の遠足がそれであるが，夫に食事を作ることを拒否し，その上二階の一室に閉じこめ，「ソーセージ野郎」という呼び名以外に使わないほどの激しい憎悪の中にあるこの夫婦の仲を変えることはできない。それから20年も経ってから，もうチューリヒに住んでいなかったフーフの許にイタリヤに住み，製本業者として妻子と幸せに暮して

いる四人息子の中の一番年下の Paul が，フーフのことを忘れず手紙を書いてきて，フーフと遊んだ楽しかった幼年時代のことをなつかしく想い出させる件は，才月をこえて結びついた人間同志の心の絆の強さを物語っている。この回想の中の一駒は変転きわまりないパウルへの同情の念を読者に惹き起さずにはいない。

このヴァナー夫人とはフーフはとにかく気が合って，夫人の故郷へも連れ立って旅行に出かけ，キリスト教徒の巡礼地を訪れたり，ひなびた田舎の踊りに加わって靴下に穴があくど踊りまくったり，また生まれてはじめて登ったアルプスの峰で山腹を埋めつくす石楠花の美しさに目を奪れたりしている。

フーフはヴァナー夫人が他人に吹聴するほど勤勉に学んだが，生活をエンジョイすることにもやぶさかではなかった。

このヴァナー夫人の許を去ることになったのは，フーフ自身の自発的行為ではなく，外からの力による。フリッチェ（Fritzsche）という神学の教授が女子大生フーフのためにそこが生活環境として相応しくないと配慮して転居を勧めたからである。

結果からするとこの転居はフーフの勉学のためには良かったかも知れない。立ち去って行くフーフには去り難い居心地のよさ，夫人や息子たちへの断ち難い惜別の情があったと思われるが，フーフはそれを決して言葉で表明しようとはしない。無言であることがかえって濃やかな情愛を巧まず表現している。

このことはこの書の結末をしめくくる事件，つまり彼女の国籍証明の件でスイスを離れざるをえなかった経緯の淡々として記述とも軌を一つにしている。

ヴィドマン（Joseph Viktor Widmann）は＜Berner Bund＞紙の編集長である。学生々活をはじめたばかりのフーフが習作として書いた＜Goldinsel＞という小説が偶然この編集長の目にとまり，同紙日曜版の付録に掲載された。ポルトガル人の世界発見時代を扱い，標題どおり大量に金を産出する島のことであったらしい。歴史学徒の彼女に相応しいテーマである。しかし作者自身が「ポエジーが未熟であり」また「骨のないお粥」のような作品であったと述懐

しているのだから，極めて不完全な出来映えだったと考えられる。そんな作品をヴィドマンはとにかく採用してくれ，その後も彼はフーフを父親のような暖い目で見守り，彼女の作品を批評したり，その出版の折衝に当たってくれたりしている。フーフの記述によると，彼の家庭は芸術愛好の雰囲気が漲り，ヴィドマン自身ジャーナリストであると同時に詩人であった。この作品掲載で40フランの原稿料を生まれてはじめての収入として受け取ったフーフは，友人と一緒の写真を撮ってもらい，祖母に送っている。このヴィドマンと親交を結ぶ契機は彼がイタリヤ古典文学の愛好家で，フーフがその傑作の一つ Ariost の<Olint und Sopfronia>を識っていたことで糸口がひらけたのである。趣味の一致や愛好作品がとりもった交友関係というべきであろうか。

フーフとヴィドマンとの往復書簡については Paula Mutzner の <Die Schweiz im Werke Ricarda Huchs>に詳しい。

フーフがベルンの文書館で資料収集中（1890—91），下宿の同宿人として3人の日本人がいた。

一人は将校クラスの軍人 Songinohara である。on が ou の誤植であるという仮定をすると，スギノハラと読めるが，人名事典で該当者を見つけることができない。彼はヨーロッパの軍事々情を研究するため各国を旅行している。

名前が記されているもう一人は Mitzsukuri で，後になって彼はフーフに自分の書いた学位論文を贈っている。そのテーマは Cromwell 時代のイギリスとオランダの関係を扱っている。察するに歴史学徒の選びそうなテーマである。

この日本人は箕作元八（1862—1919）ではないだろうか？　がしかしこの推測には細部において若干疑義が残る。

平凡社版人名事典によると，彼は美作津山の蘭学者箕作秋坪の四男，奎吾，大麓，佳吉といういづれも有名な学者兄弟の四男である。最初東京外国語学校で英語を学び，次いで東京帝国大学理科大学で動物学を修め明治18年に卒業。翌19年（1886）私費でドイツのフライブルク大学，ワイズマン教授の許で動物学を研究したが，強度の近眼で顕微鏡が使えず，それが原因で自然科学の研究

を断念，ハイデルベルクおよびベルリンの諸大学でトライチュケ，ランケ等について史学を修めた。上野益三氏の「歴史学に転じた動物学者一箕作元八覚書一」（＜学鐙＞昭和60年7月号）では，この動物学から歴史学への転換が，自費による留学であったから可能であったと推測されている。

ヨーロッパに7年滞在，明治25年（1892）帰国して高等師範学校，次いで第一高等学校の教授になった。明治33年（1900）歴史学研究のためフランス留学の命をうけて，主にフランス大革命史とナポレオン時代史の研究を続け，明治35年（1902）帰国して帝国大学文科大学教授となり，翌36年（1903）に文学博士の学位を受けた。

箕作元八がベルンの町でフーフと会ったのは，彼が自然科学から歴史学に転じた第一回目の私費留学のことと考えられる。そしてこの折すでにドイツでドクトルの学位を得ていたからこそフーフに学位論文を贈ったのであろう。フーフの記憶に誤りがないとすれば彼はドイツと日本の双方で学位を得たことになる。

フーフの記述によると，まったく藪から棒に「あなたは三位一体をどう考えますか？」と彼はフーフに質問して彼女をびっくりさせてしまったらしい。こんな質問をきっかけに話がすすんだとみえ，フーフは「彼ら日本人がおそらく数年にもわたる（外国）旅行から帰国したとしても，彼らは，彼らを待っている身内の者たちに腰や頭をかがめるお辞儀しかしないし，抱擁や接吻など問題にならぬ」（S.43）という話を聞かされて，ヨーロッパ人と日本人の感情の表現の仕方は，風俗や習慣の違いに「民族の対立を強くおぼえ」たという感想をのべている。

スイスはフーフにとって理想的国家形態である共和制の国であり，外国人を偏見なく受け入れる寛大で自由な国，そしてなによりも女性に学問の自由を保証した国であり，それ故にこそフーフに学問研究と創作活動の土台を培った国であった。

またその国際的雰囲気の中でぜいたくな生活をということはできなかったが，生活の難儀に遭わせることなく，社会的エリートとしてのおおらかで自由

な生活を享受させ，青春時代の貴重な財宝である友情と恋愛を恵み味わせたのである。

しかしこの自叙伝の結末では，フーフの国籍が不明であったために――その責任は彼女の父親にあったと言えるのではないか――女学校の歴史と文学の教師として，自から望んだスイス永住を果すことができなかったことにふれている。スイスを去ってブレーメンに移住せざるをえなかった事実は青春時代の終幕を悲劇でしめくくることにはなったが，彼女はそれを殊更に悲劇めいた感情でうけとめていない。

しかしスイスはフーフにとって大学生活開始の準備から学位取得にいたる約10年間，回想のうちで楽園であった。

Atlantis 版の＜スイスの春＞のカヴァーに載せられた Reinhold Schneider の賛辞は「この書物は暑い夏と，完成した，澄明な秋を約束する春を描いている」と記して，「春」という標題をもつこの書物の意義を巧みに言い当てている。

使用テキスト

Ricarda Huch : Frühling in der Schweiz. Fünfte Auflage 1960 Atlantis Verlag A. G. Zürich.